

木枯の日の記憶

ひと日サーカスを観てー

木枯の 寒い寒い日であつた
微酔の 悲しい機嫌の日であつた

少女が綱を渡つてた
露はな肌も寒むさうに
いのちの綱を渡つてた

綺麗な素足が宙を踏む
一寸道化てまた渡る
細い細い綱だつた

宙に咲いたり 返つたり
余り見事に恍惚と

只観衆ひとびとは面白さう
一杯機嫌で眺めてた

浮かれ心に誘はれて
この私もうかうかと
悲しい気持ちで眺めてた

少女が綱を渡つてた
恰も宙を踏むやうに
いのちの綱を渡つてた

木枯の 寒い日であつた
微酔の 悲しい機嫌の日であつた

一九三七・十一・二九・作

(昭和十三年「山桜」一月号)